

# 山武町椎崎遺跡

主要地方道成東・酒々井線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

千葉県土木部  
財団法人千葉県文化財センター

# 山武町椎崎遺跡

主要地方道成東・酒々井線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

千葉県土木部  
財団法人千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県北東部の九十九里平野を望む台地上は、古来より豊かな自然環境に恵まれ、多くの先人の生活や活動の跡が、歴史的・文化的遺産として数多く残されています。

その一方、人々の生活環境はモータリゼーションの発達によって便利なものへと変化し、千葉県においても、交通網の整備は急務を要するものとなりました。

このたび千葉県土木部では、道路網整備の一環として主要地方道成東・酒々井線の建設を計画しました。

千葉県教育委員会では、路線用地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、千葉県土木部と慎重に協議を重ねて参りましたが、路線内の遺跡については現状保存が困難であるとの判断がなされ、やむを得ず、発掘調査を事前に実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。記録保存に当っては、財団法人千葉県文化財センターが担当することになり、昭和62年度に椎崎遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、椎崎遺跡は、旧石器時代から、近世にかけての複合遺跡であることが判明し、旧石器時代の石器群や縄文時代の落し穴等、検出された遺構及び遺物の数々は、当時の人々の狩猟活動の一端を解明するうえで貴重な資料と思われます。

このたび、整理作業も終了し、その成果を『山武町椎崎遺跡』として刊行する運びとなりました。本報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護思想の啓蒙・普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終わりに、発掘調査から報告書刊行まで、種々御指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ千葉県土木部、山武町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力に御礼申し上げます。

また、炎天の現場での調査及び整理に携われた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和63年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

## 凡　　例

1. 本書は、~~山武郡山武町椎崎字庚申塚1335-1他に位置する~~椎崎遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コードは、405-001である。
2. 発掘調査は、主要地方道成東・酒々井線建設に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、下記の担当により昭和62年6月8日より昭和62年7月31日まで実施した。  
調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内 茂、班長 矢戸三男、主任調査研究員 郷堀英司  
調査研究員 麻生正信
4. 整理作業は、下記の担当により昭和62年8月1日より昭和62年8月31日まで実施した。  
調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内 茂、班長 矢戸三男、調査研究員 麻生正信
5. 本書の編集は、班長 矢戸三男の指導、助言のもとに、田島 新、石橋宏克の協力を得て、麻生正信が行った。
6. 本書の分担執筆は、下記のとおりである。  
麻生正信 I-1、2、3、II-3、4、5、6、III  
田島 新 II-1  
石橋宏克 II-2
7. 本書に収録した調査記録、出土遺物は、財団法人千葉県文化財センターが所蔵、保管している。
8. 発掘調査、整理作業、報告書刊行にいたるまで、下記の諸機関、諸氏の御指導、御協力を賜りました。記して、ここに謝意を表します。  
千葉県教育庁文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県山武土木事務所、山武町教育委員会  
太田文雄、小久賀隆史、小高良平、柴田龍司、山本正雄

## 本文目次

### 序 文

### 凡 例

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第3節 調査の方法	2
第Ⅱ章 検出した遺構と遺物	3
第1節 旧石器時代	4
第2節 繩文時代	7
第3節 奈良・平安時代	7
第4節 近世	9
第5節 土壙	11
第6節 溝	11
第Ⅲ章 まとめ	14

## 挿図目次

### 第1図 周辺遺跡分布図

### 第2図 周辺地形図

### 第3図 周辺地形図

### 第4図 グリッド設定図

### 第5図 旧石器・上層遺構確認グリッド配置図、遺構全体図

### 第6図 旧石器時代遺物出土状況図、土層断面図

### 第7図 旧石器時代遺物実測図

### 第8図 遺物実測図、遺物拓影図

### 第9図 遺構実測図

### 第10図 遺構実測図

## 図版目次

- 図版 1 1 発掘前風景 2 第001号土壤跡
- 図版 2 1 第002号溝跡 2 第004号溝跡
- 図版 3 1 第005号溝跡 2 第006号溝跡
- 図版 4 1 第007号落し穴跡 2 第008号落し穴跡
- 図版 5 1 旧石器時代遺物出土状況 2 同左
- 図版 6 1 旧石器時代出土遺物 2 繩文時代出土遺物  
3 奈良・平安時代出土遺物 4 近世出土遺物

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧表

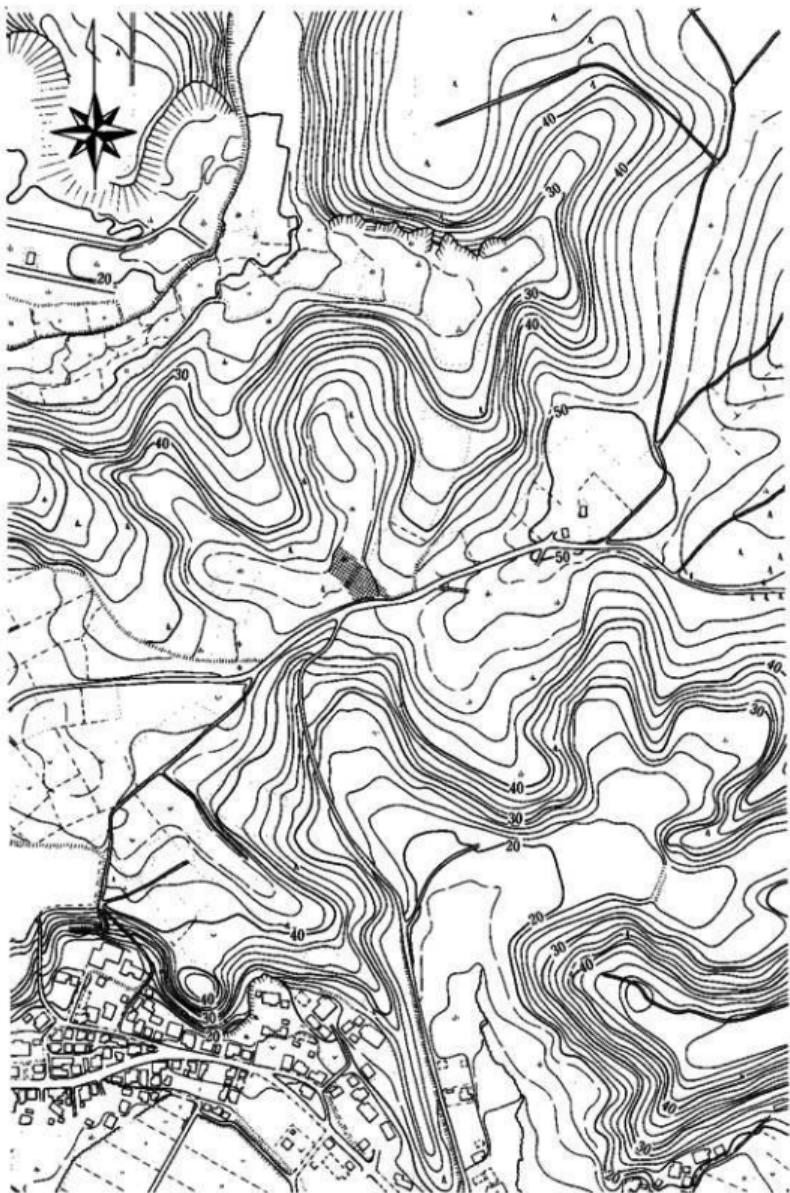
第2表 旧石器時代石器計測表 ..... 6



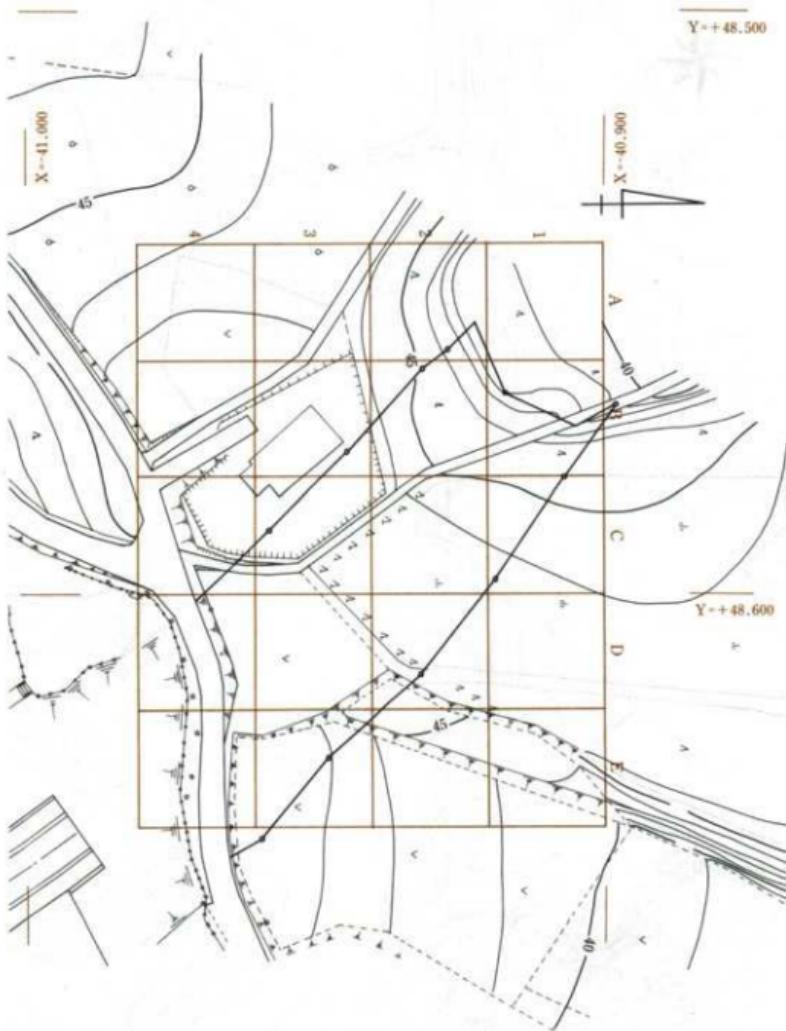
第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院発行1/25,000八街・成東)

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所 在 地	種別	遺 跡 概 要			備考
				時 代(時 期)等	造 構・造 物 等	立地・現状	
1	椎崎遺跡	椎崎字夷原1335-1、1336-1	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安・近世	旧石器(角錐状石器)・縄文土器・土師器(圓分)・須恵器・陶片	台地・山林・畠	
2	丸山遺跡	椎谷字丸山1548	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	縄文土器・土師器	台地・畠	
3	椎谷南城跡	椎谷字結城他	城 隅	中世		台地・山林	
4	岩之谷台遺跡	木原字岩之谷台・花之谷台・波山・大山細田台他	散布地	古墳(後)・奈良・平安	土師器(鬼高・真間・圓分)	台地・畠・宅地	
5	京塔台II遺跡	木原字京塔台299・山崎277他	散布地	古墳(後)	土師器(鬼高)・須恵器	台地・畠	
6	南台遺跡	椎谷字南台1927他	散布地	平安	土師器(圓分)	台地・畠	一部消滅
7	上萬台遺跡	椎谷字上萬台1896-3他	散布地	奈良	土師器(真間)	台地・畠	
8	阿歌板遺跡	椎谷字阿歌板1766	散布地	縄文(早)	縄文土器(奈良文)	台地・畠	
9	南中之谷津遺跡	椎谷字南中之谷津685他	散布地	平安	土師器(圓分)	台地・畠	
10	西花園遺跡	戸田字西花園1503他	散布地	縄文(中)・古墳(後)～平安	縄文土器・土師器(鬼高～圓分)	台地・畠	
11	西神奈台原群	椎崎字西神奈台1286	原	中近世	原8	台地・山林	
12	東道芝遺跡	椎崎字東道芝1421	散布地	縄文(早)	縄文土器	台地・畠	
13	阿来遺跡	椎崎字阿来1300	散布地	平安	土師器(圓分)	台地・畠	
14	萩ケ谷古墳群	椎崎字萩ケ谷	古 墳	円墳5	台地・山林	一部消滅	
15	東椎崎台遺跡	椎崎字東椎崎台	散布地	古墳・奈良・平安・室町	土師器	台地・畠	
16	西椎崎台遺跡	椎崎字西椎崎台他	散布地	古墳・奈良・平安	土師器	台地・畠	
17	椎崎古墳群	椎崎字向台他	古 墳	古墳	円墳18	台地・山林・畠	
18	荒追遺跡	椎崎字荒追514	集落跡	奈良・平安	住居跡・壇立柱・雜物跡・堅・土塙・壁列・土筋器(真間・圓分)・須恵器・鉄製品	台地・畠	昭和57年度調査
19	庚塚遺跡	椎崎字庚塚・荒追	散布地	平安	土師器(圓分)	台地・畠	荒追遺跡として一部調査
20	切通遺跡	椎崎字切通681	集落跡	平安	住居跡3・土師器(圓分)	台地・畠	
21	広畠遺跡	椎崎字広畠793	散布地	縄文(後)・平安	縄文土器・土師器(圓分)	台地・畠	
22	觀音台遺跡	椎崎字觀音台581	散布地	縄文(後)・晩	縄文土器	台地・畠	
23	柴燒神遺跡	矢部字柴燒神566	散布地	旧石器・縄文・古墳(後)・平安	旧石器(ブレイド・フレイク)・縄文土器・土師器(鬼高・圓分)	台地・畠	
24	木戸谷遺跡	椎崎字木戸谷1141	散布地	縄文(早)・古墳(中・後)	縄文土器・土師器(和泉・鬼高)	台地・畠・山林	
25	吉ヶ谷遺跡	森字吉ヶ谷550・森字城之台633他	散布地	古墳・奈良・平安	土師器	台地・畠	
26	森城跡	森字城府他	城 隅	中世		台地・山林	
27	外出山遺跡	森字外出山・森字木造山他	散布地	古墳(後)	土師器(鬼高)	台地・畠	
28	森台古墳群	森字下内野他	古 墳	方墳1・円墳16	台地・山林・畠		



第2図 周辺地形図 (1/5,000)



第3図 周辺地形図 (1/1,000)

## 第Ⅰ章 序 説

### 第1節 調査にいたる経緯

千葉県土木部は、主要地方道成東・酒々井線バイパス工事を計画した。これに伴い、千葉県土木部より千葉県教育委員会へ、建設予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。そこで、千葉県教育委員会は、現地踏査を実施したところ、遺跡の所在が確認されたため、その旨を千葉県土木部へ回答した。

その後、遺跡の取り扱いについて慎重に協議を重ねたが、事業計画の変更が困難であるということで、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整った。

千葉県教育委員会は、財団法人千葉県文化財センターを調査機関として指定し、これに基づいて、昭和62年4月に千葉県土木部と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され、調査を実施することとなった。

椎崎遺跡については、まず昭和62年6月8日から、山武郡山武町椎崎字庚塚1336-1番地1,200m<sup>2</sup>を対象とした確認調査が行われ、遺構、遺物とともに分布濃度が薄いため本調査は不要とされ、昭和62年6月19日に確認調査は終了した。その後、昭和62年7月1日より山武郡山武町椎崎字庚塚1335-1番地700m<sup>2</sup>を対象とした確認調査が行われ、遺構、遺物とともに分布濃度が薄いため本調査は不要とされ、昭和62年7月24日に確認調査は終了した。

### 第2節 遺跡の位置と環境

椎崎遺跡は、印旛郡八街町五方杭付近に源を発し、下総台地を開析して山武郡成東町津辺から、九十九里平野を流下し太平洋に注ぐ作田川流域に面した台地上にある。旧海食崖から5km程内陸部にさかのぼった地点で、現行政区画上の位置は山武郡山武町字庚塚1335-1、1336-1番地籍に当たる。本遺跡のある台地は、長期間の小河川による侵蝕作用によって、樹枝状に開析されており、旧海食崖の東側には縄文時代以降に形成されたと推定される海岸平野である九十九里平野が太平洋まで続いている。

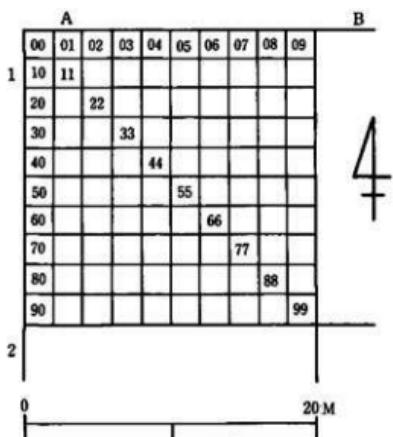
作田川が開析した谷は、左岸は奥行きの深い大規模な支谷、右岸は狭くて短い支谷が連続するという特徴をもっている。

本遺跡のある台地は、椎崎の支谷が字大椎崎の台地と字弓手の台地に挟まれた部分を開析した約150mの開口部から、四つの支谷をもつ谷部の一番西側の最奥部にあり、北側からは、字古谷を開口部とする支谷により開析され、尾根状になっており、標高は42mを測る。

本遺跡の周辺には、旧石器時代から、中・近世までの各時期の遺跡の存在が知られている。旧石器時代では、23栗焼棒遺跡。縄文時代では、2丸山遺跡、8阿歌坂遺跡(早期)、10西花岡遺跡(中期)、12東達芝遺跡(早期)、21広畑遺跡(後期)、22観音台遺跡(後・晚期)、23栗焼棒遺跡、24木戸谷遺跡(早期)。古墳時代では、2丸山遺跡、4岩之谷台遺跡(後期)、5京增台遺跡(後期)、10西花岡遺跡(後期)、14萩ヶ谷古墳群、15東椎崎台遺跡、16西椎崎台遺跡、17椎崎古墳群、23栗焼棒遺跡(後期)、24木戸谷遺跡(中・後期)、25宮ヶ谷遺跡、27外出山遺跡(後期)、28森台古墳群。奈良・平安時代では、2丸山遺跡、4岩之谷台遺跡、6南台遺跡、7上鳥台遺跡、9南中ノ谷津遺跡、10西花岡遺跡、13阿楽遺跡、15東椎崎遺跡、18荒追遺跡、19庚塚遺跡、20切通遺跡、21広畑遺跡、23栗焼棒遺跡、25宮ヶ谷遺跡。中・近世では、3埴谷南城跡、11西神楽台塚群、15東椎崎台遺跡、26森城跡等があげられる。(第1図、第1表)

### 第3節 調査の方法

本遺跡では、公共座標を基準に20m×20mの大グリッドを設定した(第3図)。大グリッドは、北から、1、2、3と数字を、西から、A、B、Cとアルファベットを付した。大グリッドの内部は、2m×2mの小グリッドに分割し、00から99までの番号を付した(第4図)。従って、各々のグリッドは、大グリッド番号と小グリッド番号の組み合わせた4桁の記号で表現されることになる。

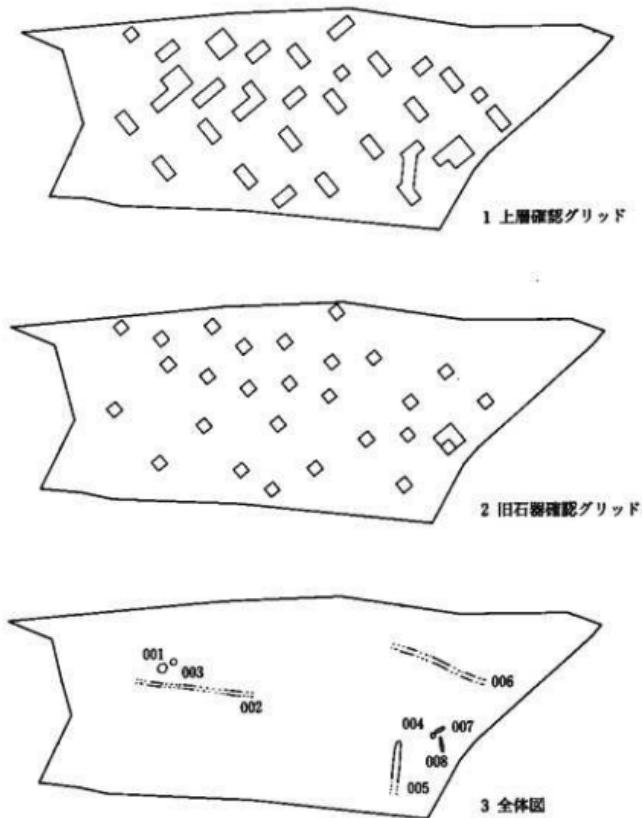


第4図 グリッド設定図

## 第II章 検出した遺構と遺物

### はじめに

本遺跡は、対象面積1,900m<sup>2</sup>のうち、確認調査を上層190m<sup>2</sup>、下層76m<sup>2</sup>を実施した。その結果、遺構、遺物ともに分布濃度が薄いため、確認調査で検出された遺構の調査のみを実施した。したがって、調査を実施した面積は、上層1,330m<sup>2</sup>、下層100m<sup>2</sup>である。

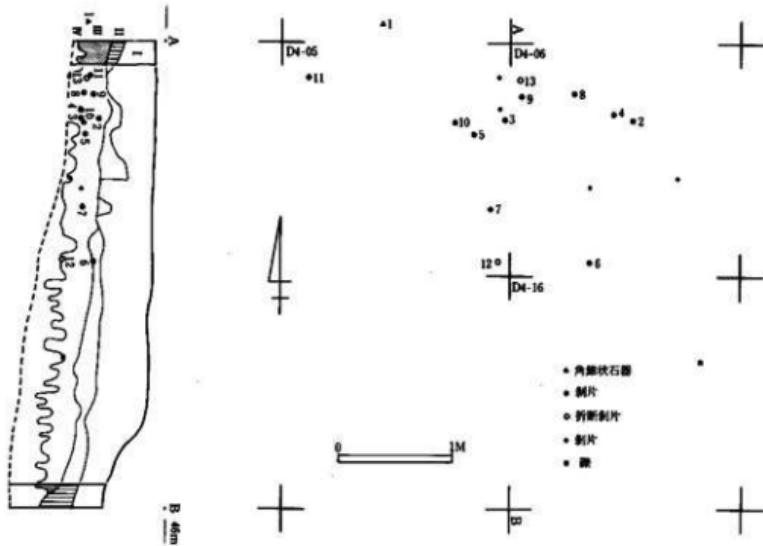


第5図 旧石器・上層確認グリッド配置図・全体図 (1/1,000)

## 第1節 旧石器時代

### 出土状況（第6図・図版5）

本遺跡では、1ブロックのみを検出した。石器群は、発掘区南側緩斜面にかかる肩口に集中しており、D4-16グリッドを中心として約4mの範囲内に分布する。出土層位は、第III層（ソフトローム）上部から下部にかけてで、中心は下部である。出土地点が斜面に近いことから、遺物の垂直分布も南に緩く傾斜するあり方を示している。平面分布のあり方は、角錐状石器・大型の剥片・礫等が外縁にみられ、小型の剥片・碎片が主体をしめている。



第6図 旧石器時代遺物出土状況図・土層図 (1/50)



第7図 旧石器時代遺物実測図（角錐状石器1. 刺片2~13 2/3）

標図番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	遺物番号	備 考
第7図1	角錐状石器	7.1	1.4	1.1	5.1	珪質頁岩1	D3-95-1	
2	剝 片	4.2	1.3	0.8	4.4	珪質頁岩2	D4-06-3	調整打面
3	剝 片	3.9	0.7	0.6	1.3	珪質頁岩3	D4-05-7	縫状の打面
4	剝 片	3.1	0.8	0.4	0.4	珪質頁岩4	D4-06-2	点状の打面
5	剝 片	1.5	1.7	0.5	0.7	珪質頁岩5	D4-05-5	点状の打面で頭部調整が顕著
6	剝 片	1.5	1.2	0.3	0.4	珪質頁岩6	D4-06-6	平坦打面
7	剝 片	1.1	1.3	0.4	0.3	珪質頁岩7	D4-05-2	平坦打面
8	剝 片	1.2	1.5	0.3	0.3	珪質頁岩2	D4-06-1	点状の打面で頭部調整有り
9	剝 片	0.8	1.4	0.4	0.2	珪質頁岩4	D4-06-7	点状の打面
10	剝 片	0.7	1.8	0.2	0.2	珪質頁岩4	D4-05-4	平坦打面であるが打面の起伏が激しい
11	剝 片	5.7	3.9	1.8	32.7	珪質頁岩8	D4-05-3	
12	折断剝片	(1.9)	(1.6)	0.4	(1.0)	珪質頁岩6	D4-05-1	
13	折断剝片	(1.4)	1.1	0.5	(0.6)	珪質頁岩6	D4-06-8	
	碎 片	0.6	1.0	0.1	0.1	珪質頁岩4	D4-05-6	
	碎 片	1.1	0.5	0.3	0.1	珪質頁岩2	D4-06-4	
	碎 片	0.8	0.5	0.1		珪質頁岩2	D4-06-5	
	碎 片	0.5	0.7	0.1		珪質頁岩9	D4-05-8	
	砾	(2.0)	(3.4)	(1.0)	(6.6)	砂 岩	D4-16-1	

第2表 旧石器時代石器計測表

遺物（第7図・図版6・第2表）

石器及び砾は、18点出土しておりその内訳は、角錐状石器1点、剝片12点、碎片4点、砾1点となっている。母岩は、10種類に識別された。珪質頁岩が9種類、砂岩が1種類で、石器はすべて珪質頁岩である。

1は、横長剝片を素材とした角錐状石器である。面的な調整（長さ・幅共に0.8cm内外）が施された後、両側縁及び器体中央部左側に稜上から細かい調整（長さ・幅共に0.3cm内外）が施されている。この調整により、鋸歯状縁を呈している。下端部は、裏→表の剝離痕をもつ折断面である。

2～13は剝片で、そのうち12・13は折断剝片である。また、2～4は縦長剝片、5～10は横長剝片である。

2は、打面調整の施された剝片で、末端部はヒンジフラクチャーである。

3も末端部は、ヒンジフラクチャー気味である。

11は、ほぼ90度の打面転移の痕跡を残す剝片で、あるいは打面再生剝片かもしれない。

13は、打面調整剝片である。右側縁の細かい剝離痕は、頭部調整の痕跡か？

12、13はいずれも上部を折断するが、折断方向は逆である。

砾は、ほとんどを破損している。被熱の痕跡は、ないようである。

## 第2節 繩文時代

本遺跡で、縄文時代の遺構と考えられるのは、落し穴2基だけである。遺物は、確認調査によって、グリッド一括として取り上げられているため、遺構内からは出土していない。細片で、8片が数えられる。

### 第007号跡（第9図・図版4）

D4-15グリッドに位置する。検出できた範囲内で、長軸1.5m、短軸0.23mの長橢円形を呈し、深さは確認面より0.75mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、床面は北側がやや下がっている。東側の壁が少しオーバーハングする。

### 第008号跡（第9図・図版4）

D4-05グリッドに位置する。長軸2.37m、短軸0.85mの長橢円形の平面形を呈し、深さは、確認面より1.35mを計る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、長軸両端の壁は、東側は0.1m、西側は0.05m程オーバーハングする。床面は、ほぼ平坦であるが、東側が0.1m程度下がっている。

### グリッド出土の縄文土器（第8図、1～8・図版6）

本遺跡からは、縄文時代前期から後期にかけての土器片が断片的に出土した。器形を窺えるものはない。

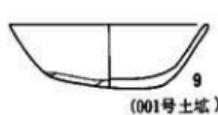
1は、土器の胎土中に砂粒子を多く含み、内面は縦位のケズリを残す。文様は、3を一つの単位とした平行沈線により、鋸歯状文を施したものである。前期後半の条線文土器であろう。2・3は、同一個体である。口縁部は、平縁でやや内湾気味となる。口縁部から底部にかけて縦位の沈線を施すものである。4は、単節縄文（RL）を施すものである。胎土中に雲母粒子を多量に含んでいる。5は、単節縄文（RL）を縦位に施すものである。いずれも加曾利E式土器に比定できよう。6は、粒の荒い単節縄文（LR）を施す。7は、単節縄文（原体不明）と半截竹管による平行沈線文を施すものである。8は、沈線文を横位に施文するものである。いずれも加曾利B式土器の粗製土器であろう。

## 第3節 奈良・平安時代

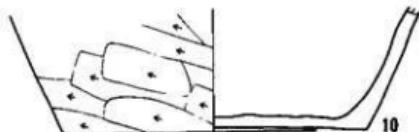
本遺跡で、奈良・平安時代の遺構と考えられるものは、土壙1基だけである。遺物は、確認調査によって、グリッド一括として取り上げられている。図示できるものは、第001号土壙より出土した壺1点と、C2-55、65グリッド出土の甕底部1点とE4-00グリッド出土の墨書き土器



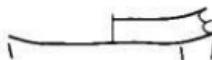
0 5CM



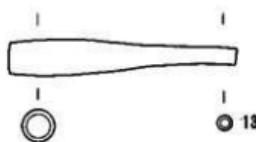
(001号土塁)



0 10CM



11



0 5CM



14



0 2.5CM

第8図 出土遺物実測図・拓影図(1~8、11~13 1/2 9,10 1/4 14,15 1/1)

(壺) 1点のみである。(第8図、9・図版6) 他に、テン箱1箱分の細片が出土しているが、復元図示できるものはない。

壺は、底径20.8cm、現存高8.8cmを計る。胴部下半を横位ヘラケズリを施す。

墨書き土器は、壺底部外面に2字書かれているが読みは不明である。壺の底径は、4.8cmを計る。底部は、貼付け高台でヘラケズリ調整を施す。

その他に、鉄滓が出土している。

#### 第001号跡(第9図・図版1)

C2-10グリッドに位置する。長軸1.45m、短軸1.35mの橢円形の平面形を呈し、深さは確認面より、0.12mを計る。壁は、ゆるやかに立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。

遺物 壺が1点出土した。口径13.8cm、器高4.5cm、底径7.8cmで、内外面ともヘラナデ調整している。二次焼成により、内面の器面剥離が著しい。(第8図、9・図版6)

### 第4節 近世

本遺跡で、近世の遺構と考えられるものは、検出していない。

遺物は、壺が1点、煙管が1点、古銭が1点、泥面子が1点出土した。

#### 壺(第8図、12・図版6)

底径4.6cm、現存高3.0cmを計る。D2-91・92グリッドより出土した。江戸時代後期の所産と考えられる。

#### 煙管(第8図、13・図版6)

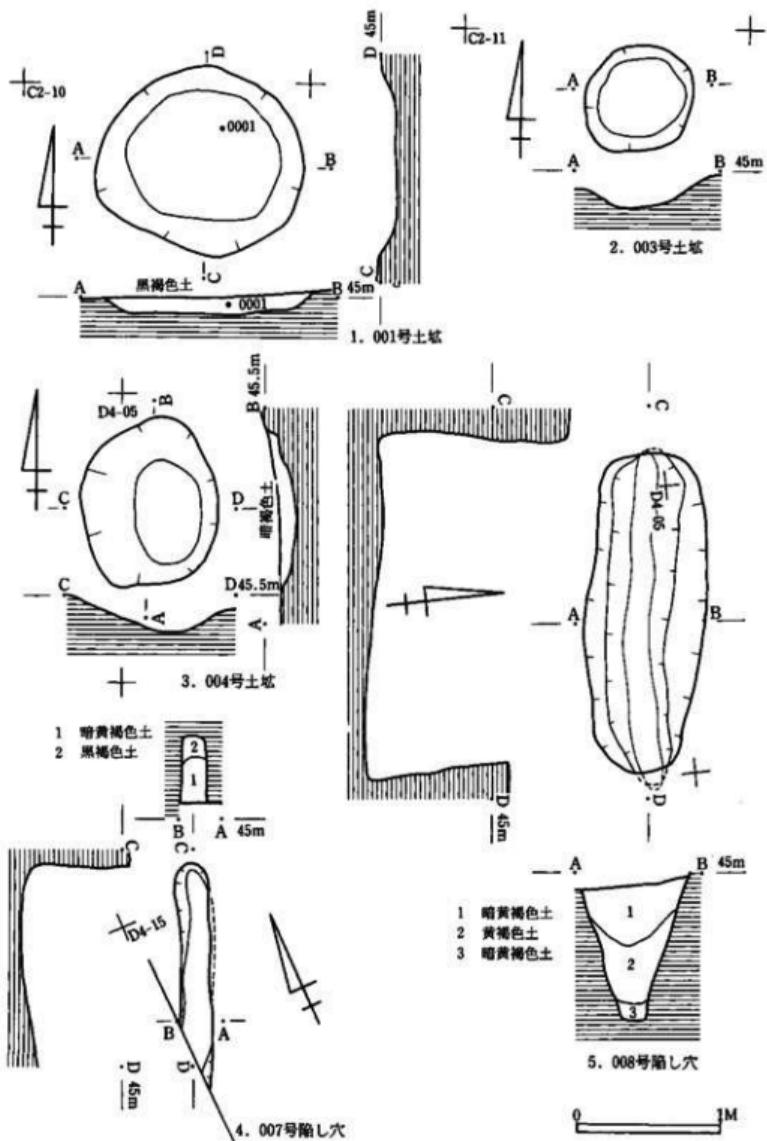
長さ8.0cm、口径1.1cm、吹口口径0.5cmを計る。銅製。D4-05グリッドより出土した。

#### 古銭(第8図、14・図版6)

寛永通宝である。D3-59グリッドより出土した。外線外径20.45mm、外線内径19.05mm、内郭外径9.2mm、内郭内径6.3mm、外縁厚1.3mm、内縁厚0.5mm、文字面厚1.0mm、重量3.55gを計る。

#### 泥面子(第8図、15・図版6)

絵柄 紋章(鶴丸)、材質 素焼、成形 型押、遺存状態 完存、縦12.5mm、横11.0mm、厚5.6mm、重量1.3gを計る。D3-55グリッドから出土した。



第9図 遺構実測図 (1/40)

## 第5節 土 壤

ここで取り扱う土壌は、出土遺物により時期決定するには至らなかったもので、2基が検出された。

### 第003号跡（第9図）

C2-11グリッドに位置する。長軸0.83m、短軸0.75mの橢円形の平面形を呈し、深さは確認面より0.24mを計る。

### 第004号跡（第9図・図版2）

D4-05グリッドに位置する。長軸1.22m、短軸0.98mの橢円形を呈し、深さは確認面より浅い部分の東側で、0.16m、深い部分の西側で、0.2mを計る。壁は、ゆるやかに立ち上がる。床面は、全体に凹面状を呈する。

## 第6節 溝

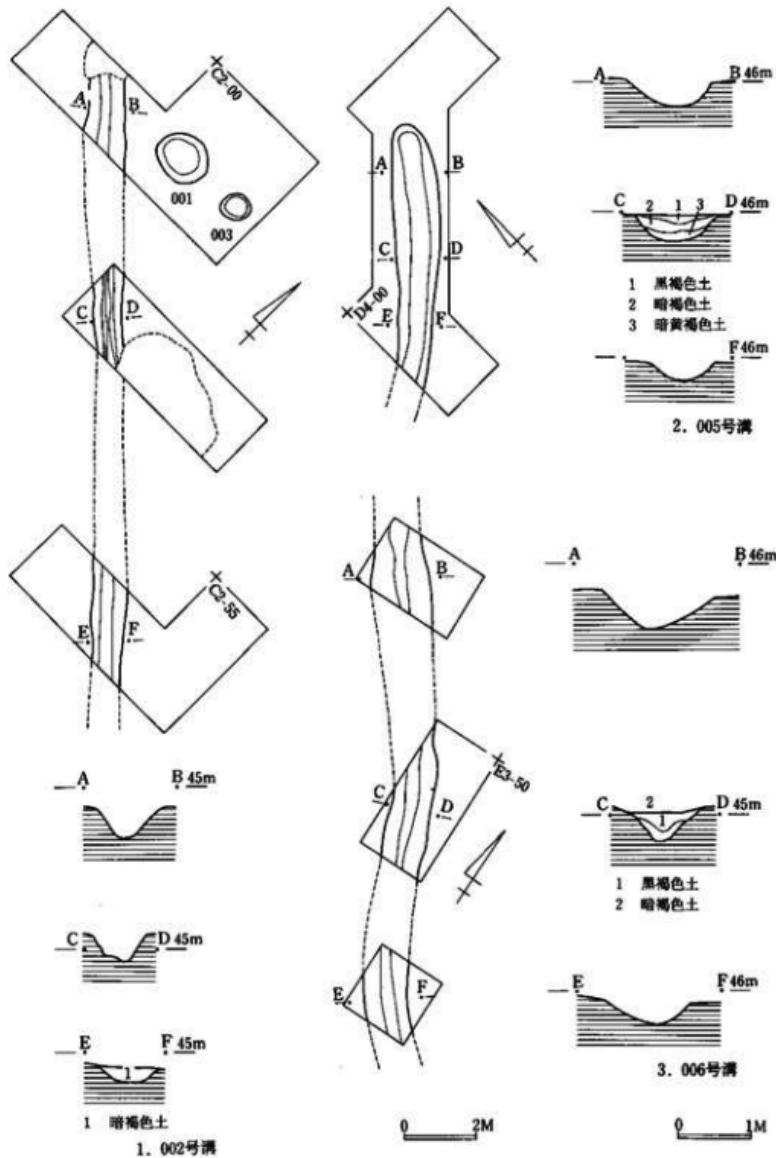
本遺跡では、3条の溝が検出されたが、出土遺物により時期決定するには至らなかった。

### 第002号跡（第10図・図版2）

B2-19グリッドから、C2-75グリッドにかけて検出された。確認調査によって、設定されたグリッド内のみ調査が実施された。幅0.4m、深さ北側で0.2m、南側で0.1m。長さは、検出された部分で10mを計る。壁は、ゆるやかに立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。台地斜面部に、等高線と直行する方向に位置する。本溝は、北側の斜面下部に行くに従って、堀方が浅くなり消滅してしまう。南側の先端は、後世の地形形成により、一段低く削られておりここまで遺構が続いていたかは不明である。

### 第005号跡（第10図・図版3）

D3-82グリッドから、D4-10グリッドにかけて検出された。確認調査によって、設定されたグリッド内のみ調査が、実施された。幅0.6m、深さ0.1m、長さは、検出された部分で3.5mを計る。南側は、発掘区域外に続く。壁は、ゆるやかに立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。等高線と平行に位置する。



第10図 遺構実測図 (1/160)、土層断面 (1/80)

### 第006号跡 (第10図・図版3)

D3-27グリッドから、E3-91グリッドにかけて検出された。確認調査によって設定されたグリッド内のみ調査が実施された。幅0.85~0.6m、深さは、北西側で0.25m、南西側で0.15m、長さは、検出された部分で7.5mを計る。壁は、ゆるやかに立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。等高線と平行に位置する。発掘区の北東及び南西より入り込む谷津の谷頭部が、尾根状になった部分に、この尾根と直行する方向に本溝は掘削されている。

### 第III章 まとめ

今回報告した山武町椎崎遺跡は、道路建設予定地内だけが発掘調査の対象地であるため、遺構、遺物の分布等の把握は非常に困難であった。しかしながら、昭和57年度に、発掘調査が実施された東側に隣接する荒追遺跡群と似たような性格の遺跡と言えよう。

というのは、荒追遺跡群でも発見されている奈良・平安時代の遺物が主体となって出土している点である。本遺跡では、旧石器時代の遺物の検出や縄文時代後期の遺物の検出等が荒追遺跡群とは違う面もみられるが、出土する遺物は、荒追遺跡群でも主体であった奈良・平安時代の遺物がほとんどである。

以下に、本遺跡の概要を述べる。

旧石器時代は、1ブロックの石器群が検出された。

縄文時代は、第007、008号落し穴跡が検出された。遺物は、前期から後期にかけて断片的に出土した。

奈良・平安時代は、第001号土壙跡が検出された。遺物は、第001号土壙跡より壺が、各グリッドより細片が出土した。復元図示できるものは、壺の底部が1点のみである。

細片ではあるが、荒追遺跡群で分類されているⅠ期からⅤ期にあたる遺物が出土している。時期は、8世紀初頭より10世紀前半までに比定されよう。

その他に、鐵滓が数点出土している点も、荒追遺跡群で出土している鐵製品を伴う住居跡、小鍛冶跡と考えられる住居跡、鐵滓を検出する住居跡との関連が考えられよう。

近世は、古錢、煙管、壺等遺物の出土はあったが、遺構の検出はされない。

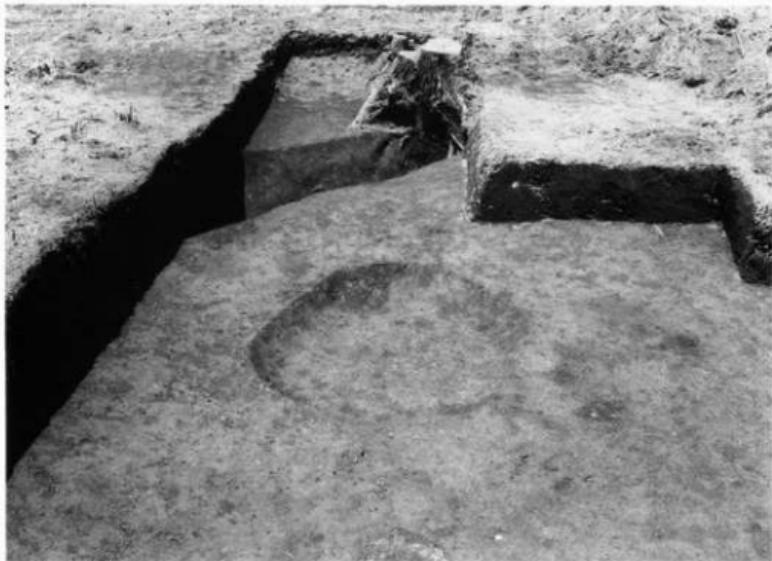
時期不明の溝については、台地斜面と平行、或いは、直行する方向で掘削されていることから、城郭に関するものとの考えも指摘することができる。

本地域は発掘調査例も少なく、まだまだ解明されなければならない問題が山積していると言えよう。調査例の増加を待って、再度検討してみたいと思う。

# 写 真 図 版



1. 発掘前



2. 001号 土壙

图版 2



1. 002号 溝



2. 004号 土墙

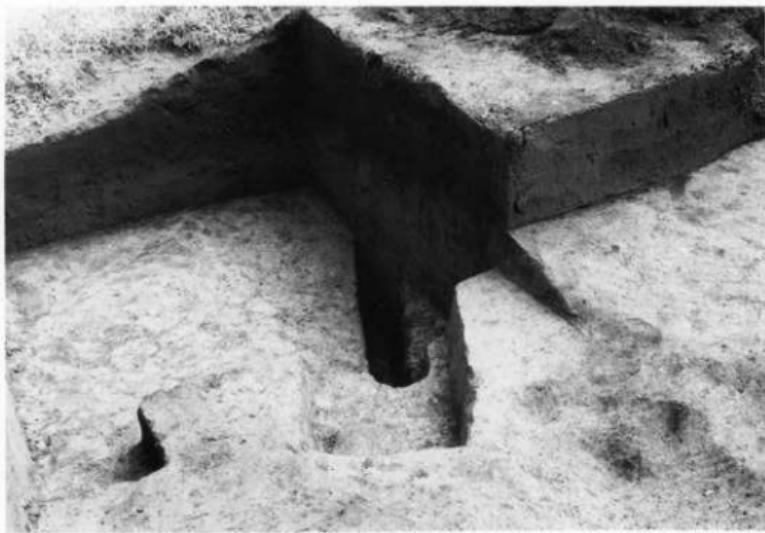


1. 005号溝



2. 006号溝

図版 4



1. 007号 落し穴



2. 008号 落し穴

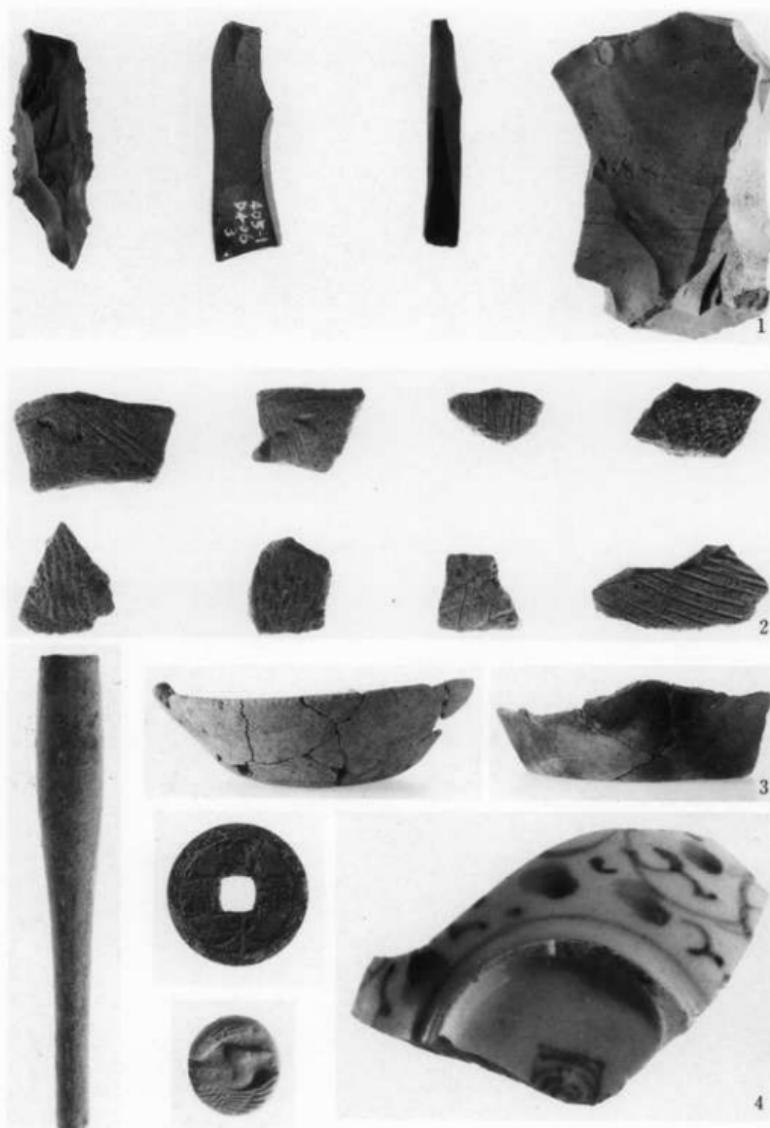


1. 旧石器時代遺物出土状況



2. 同上

図版 6



1. 旧石器時代 2. 繩文時代 3. 奈良平安時代 4. 近世

## 山武町椎崎遺跡

主要地方道成東・酒々井線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月31日

---

発行 千葉県土木部

千葉市市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478㈹

印刷 株式会社 弘文社

市川市市川南2-7-2 (0473)24-5977㈹

---